

ホトトギス

四月号

ホトトギス

昭和十四年三月二十八日運輸省特別授受承認証第六二七号
明治二十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十六年四月一日発行(第四百七巻第四号)



句日記

汀子

平成十五年四月二日 毎日新聞「花の競談」

空に置くまなざしに初桜かな
咲けば散る花の命を惜めとや
雨誘ふ風誘ふ空花心

四月二日 ロイヤル俳壇

利休忌や若き命の惜まるる
利休忌や生涯一日一日あり
雨も又落ちつく出先とて弥生
色に出てミモザの花の所在かな
利休忌に待てる心を普段着に

四月四日 「俳句王国」

咲き増えてをりし家路の初桜
雨一日風一日晴葱坊主
やうやくに遅日の家居たまはりし

四月六日 関西野分会

晩春の庭に咲く花終る花
若者と競ふ心のあたたかし
集ふこと学ぶ心のうららかに

四月六日 下萌句会

花屑に鳥の狼藉ありにけり
咲き継ぎて花の春秋ありにけり
それぞれに別の桜に戻りゆく家路
まだ花に別れ惜しめる宵となる

四月八日 虚子忌

納骨の大地鎮もる落花かな
もの芽の育つ大地に抱かれて

四月十日 清交社

み吉野の旅のはじまる花曇
探しもの又してをりぬ花曇
若者の闊歩も遍路なりしかな
案内状書くより花に置く心
計画に加へてをりぬ花曇
四月十日 「岳」二百五十号 お祝い
峨々と立つアルプス春日漲りぬ

人々の集ふ心のあたたかし
譽え立つ岳の稜線春めきぬ

四月十一日 工業倶楽部

竣工の成りし会場あたゝかし
満ちゆける月は朧でありにけり
四月十二日 吉野山くつろぎの旅

ふり返るたび咲き進む花の景
咲き進む吐息も花の吉野山
稿債を花に忘れしには非ず
まづ宿の枝垂桜に問ふ吉野
朝寝してくつろぎの旅立となる

四月十二日 第二句会

花朧人居る如くなき如く
怖くない人数で行く夜の朧
雨降つてをりし朧の闇を見る

四月十三日 くつろぎ第三句会

一閃の日矢一片の落花かな
花冷と言ひつつ宿の庭へ出る
日の射して動きはじめし朝桜
全山の花の軽さを知りし風

四月十五日 大阪倶楽部

花吹雪別るときの近づきぬ
渡る風落花先立てをりにけり
どこまでも霞める距離のありにけり
闇を着て孤高となりし桜かな

四月十五日 綿業倶楽部

花の旅組船の加はることも又
みよし野の亀鳴く静寂共有す
渡り来し象の小川の宮桜

四月十五日 綿業倶楽部

朧より抜け出して来し客となる
お隣と結界のなし百千鳥
象山の桜木の宮百千鳥

四月十六日 夏潮句会

風光るそこに加はる旅話
人立てばそこに静寂や竹の秋
旅心家居心に百千鳥

柳絮とぶ旅路はるけくありしかな

四月十七日 悼牧野耕二様
あたたかき旅路なるべし連れそひて
四月十九日 龍野市民俳句大会

離流し終へて河原の残さるる
四月二十一日 アサヒカルチャー
うららかや日本列島西東

四月二十二日 有恒倶楽部

春暁を発ちて一日使ひ切る
朝寝して別の一日はじまりぬ
青空の戻つてをりぬチューリップ
朝寝せしことの尾を引く二日目に
保護色の蛙に動く目の二つ

四月二十二日 無名会

車窓いま林檎の花に置く旅路
白といふ林檎の花に秘めし色
春宵といふ明るさに辿り着く
無事帰国告げし電話や春の宵

四月二十四日 きさらぎ会

予定表朝寝出来る日出来ない日
散るほかほなき糸桜雨上り
朝寝せしことここに居る人知らぬ
過ぎ去りし桜の日々をふり向かず

四月二十五日 時雨会

子馬跳ね母馬しざりをりにけり
嘯の一羽につづく一羽かな
足許に湧く嘯も加はりぬ
雨上りおぼろの星を蔵す空

四月二十六日 句会と講演の会

恙なき笑顔でありし春の星
壺焼の匂ひの中で解散す
壺焼の匂ひ残りぬ旅衣

四月二十七日 野分会

花終へしときは知られず沈丁花
春泥の跡の残りし旅衣
予定はば尽きたる春を惜みけり

六甲山ドライブウエー 稲畑汀子

六甲山へ向かう山道は目を瞑って運転しても行けるのではないかと思うほど私には馴れた山路である。山道が上りのカーブにかかるまでの広い道ほどの車線を走った方が安全か、右に寄った方が車線を先で変えなくてもいいからとか、それは昔よく通った六甲の山道だからであろう。

次男が生まれて間もなく私は必要に迫られて車の免許を取るこゝたになつた。はじめて買った車はプリフェクトという外車であつた。すでに十マイル走っている中古車であるが、結構よく走つた。しかし坂道では下りになるとフロアギヤがセカンドへ入れてもずとんと抜けてすぐにニュートラルになつて坂道を駆け出す。ギヤが抜けないように片手で押さえ、反対側の手でハンドルを操作して山道を降りなければならなかつた。そんな車で免許を取つたばかりの私は毎日のように六甲山の家と菅屋の家を往復したものである。

あれから四十年余りの歳月が経つた。車を買換え車種が替わる度に私の車は少しずつ昇格して行き、十数台目になる今では日産シーマを運転している。

六甲山ドライブウエーの昔の料金所は今は無くなってフリーパスになつている。その辺りから六甲山が深まり山肌の色とりどりの紅葉の錦絵巻が始まる。カーブの度に速度を落し目に飛び込んでくる景色を堪能した。この山道にはヘアピンカーブが幾つもある。カーブになると当たり前のようにハンドルを回しているのが不思議であつた。夫が亡くなってから二十数年、私は六甲山の家へ行くことは殆ど無くなつてしまつた。夫が好きだつた六甲山へ山道を毎日毎日通つたのが嘘のように六甲山の家へ行く時間は私の暮らしの中から無くなつてしまつた。

六甲山ドライブウエーの終点、丁字が辻へ出るまでの急坂は昔の車は力がなくよくオーバーヒートして動けなくなつていゝのを見かけたものである。しかし今の性能のよい車は一気に登れるようになつて故障車は見かけることも無くなつた。丁字が辻から道は平になり左右に分かれていゝ。そこから右に曲がると我が家のあるシユラインロードへ向かう道であるが今日は左へ取つて摩耶山に向かわなければならぬ。

一本の真つ赤に燃えるような楓紅葉の大木が目飛び込んでくる。山道を下り加減にぐるつとカーブすると急に視界が展げ神戸の町が見えた。大阪湾から照り返す海面の光が山の上まで届いていゝのか木々の紅葉が輝いて見える。やがて緑の草原が両側に広がりが神戸の町が見えなくなると牧場の柵が見えはじめる。六甲山牧場である。草原の起伏の広がり羊の群が点々と草を食べていゝ

るのが散見される。分れ道のカーブを左へ取りながら走ると間もなく摩耶山である。車の中は暖房が効いていて暖かいが、外は寒そうである。山の荒々しい風が吹きすさび時折木々の梢から木の葉しぐれが舞って車の視界を塞ぐ。

今日の会場である神戸市立「自然の家」はすぐに分った。二ユースで日本海側の寒さを予報していたが摩耶山も寒い。

「先生、お忙しいのによく来て下さいました。寒いので来るのを辞めるといふ電話が次々あって心配しましたが、百四十人も来て下さっています。よく晴れて本当によかった」

摩耶山天上寺の伊藤虚舟さんがにこやかに迎えて下さった。我我仲間たちが次々現れる。

「おお、寒い。でもいいお天気でようしゅうございましたね」

ひとしきり木の葉しぐれが舞う中を私は会場へと急いだ。

廣太郎句帳

廣太郎

鮒臚小鉢に近つ淡海かな 江戸前の主頑固や煮蛤

四月十二、十三日 吉野くつろぎの旅

四月十九日 伝統俳句協会関東支部大会

平成十五年四月二日 一水会

惜春の旅は吉野といふ慣ひ

東京都千代田区といふ臚かな

五十音九九も覚えて入学す

四月三日 蕉心会

フレッシュマン遠足めきて丸の内

高橋を曲り会場までの花下

亀鳴くや蕉心会は四年目に

少年の目で高橋の花を見る

模型屋の昼は閉され落花舞ふ

春の川ぬつとネツシーめく川鶺

船音の麗かに変二長調

うららかや未来のホトトギス作家

四月八日 虚子忌

又降つて又晴れて椿寿忌らしく

四月十日 土筆会

蜃気楼都市にオアシスなかりけり

対岸は妖しき国や喜見城

蜃気楼めく丸ビルの高さかな

出発の遅れし事も花の縁

この花に去年の借りは返せしと

先づ帝に詣づ高貴な花人よ

花より団子組がいつもの場所にか

籤引いて席につき桜餅食む

句やかな人に隠れし花の精

花の闇ふとあの人に会へさうな

山気とは朝桜より始まりぬ

朝桜枝の主日の落着きに

こぼるると思へば白き蝶二三

鶯に標準語教へたん誰や

四月十五日 草木瓜会

草木瓜を次々咲かせ来る句座

春の宵何時まで続くタイガース

野の色といへば種子の花とこそ

春の宵早う宿題せんかいな

四月十七日 登高会

天城てふ値段に山葵糺られけり

旅心句心弾け弥生かな

ばかと殻開き焼蛤の艶

山葵田の為のヘアピンカーブかな

瓢雨句碑落花踏み締め来たる甲斐

蒲公英の一輪句碑を守るかに

筆跡に瓢雨偲びて春深し

蒲公英にこの風及ばざる傾斜

春疾風藤原の裔動かざる

四月二十二日 若水会

春深し丸の内色濃くなりぬ

松蟬や天橋立股覗き

風船の天に消えゆく終の色

風船の膨んでより色となる

結婚の案内春蘭の人

松蟬や声も姿も日に溶けて

四月二十五日 時雨会

春の星息子宿題溜めに溜め

噂に一目千本揺れてをり

鬘に名門宿す仔馬かな

噂や木々の余白を埋め尽し

噂に此岸戻りし吉野かな

春の星今日も明日も宴会に

四月二十六日 ホトトギス社句会

杉の花吉野やうやく落着けり

雑詠 汀子選

個室とは孤独で自由秋灯
 病棟の起床時間や雁渡る
 雁の空広々と退院す
 菊日和佳き伝言を賜りぬ
 杯上げて能登の寒鱒もて祝がむ
 慶びを頒つ心に時雨虹
 火星観に來し高原の星月夜
 寝るなんて勿体なくて星月夜
 明日のため少し眠らう星月夜
 存問のとり囲みある焚火かな
 一人加はりて減ることなき焚火
 一步出て二歩の寒さに踏み出しぬ
 時雨ると芭蕉の往きし山路見る
 伊賀に來し旅人我に初時雨
 たまゆらの恍惚にあり小春の日
 身に入むや山盧の昔知る人と
 こんなにも富士の初雪近づけて
 錦秋の山盧も富士の一部分

久留米 中村田人
 同 同
 石川 辻口静夫
 同 同
 茨木 大野伊都子
 同 同
 京都 粟津松彩子
 同 同
 榎原 稲岡 長
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同

はや所在あかしそめたる式部の実
 邂逅や古都の錦の野山にも
 虚子句碑に佇てばこぼれてきし時雨
 表札を盗みゆきしは秋風か
 本復のまづ庭落葉踏み給へ
 空狭くなる冬紅葉深くなる
 登り来て月の構図の変る城
 星明りより秋冷の降る山盧
 快晴のぬくもり街に十三夜
 菊月の蜂蜜ははや固まりき
 満身に湛へし日ざし冬の山
 忌心に竜胆の野をたゞ行き来
 白樺に並んで二つハンモック
 山の星見て来て夏妒辺に語る
 眠らむか山の銀河に抱かれて
 紙衣著て花鳥風月には疎し
 熱爛に身体に芯の通りたる
 人の世の真ん中にある囲炉裏とも
 浅草に遊び詣や十二月
 仲見世や納め観音まで五日
 年の瀬の浅草はただ懐かしく
 机に対ふ朝一番の法師蟬
 庭手入心得て居り蚊遣焚く
 女手にしつらへ流す精霊舟

京都 安原 葉
 同 同
 神戸 山田弘子
 同 同
 金沢 藤浦昭代
 同 同
 熊本 河野扶美
 同 同
 日野 木村享史
 同 同
 東京 後藤立夫
 同 同
 同 同
 今井千鶴子
 同 同
 福岡 松尾緑富
 同 同

雑詠句評（三月号より）

神の森大秋晴へ抜け出たる 八尾 岩垣子鹿

具体的には何という「神の森」なのかは知らないが、亭々とした大木のそびえる深い神社の杜である。その森の深さと「大秋晴」のコントラストが、この句のポイント。神さびた森が深ければ深いほど、そこを抜け出た瞬間、頭上にひろがる大秋晴の底の底までの蒼さに感動した作者である。

「神の森」と、おだやかに叙しはじめて、一寸間を置いて、そこに森の昏さを思わせて、それから一気に「大秋晴へ」と展開し、最後に「抜け出たる」と、体ごと深い森を出たときの実感でもって締めくくる。花鳥「諷詠」の「諷詠」とは、いうまでもなくリズム感のことだが、もつというならばそれは、この句のように、体ごと森に入り体ごと抜け出るといふ、作者の深い体感・実感を伴ったリズムでなくてはならない。（中正）

深い森のたたずまいの中に入った作者はそこで荘厳な暗さに包まれていることを知った。そこには神が祀られてあり静かな中に重厚な雰囲気が出てくる。その森を出ると大秋晴の視界が広がってほっとしたのであろう。抜け出るといふ表現に緊張感から解放された心情の推移が想像される。（汀子）

握手して露の別れとふと思ふ 京都 安原 葉

思いも寄らぬ突然の辞令で、海外のそれも開発途上国の駐在に、旅立つことになった。お別れの挨拶をして、一人天に握手」をするが、普段簡単に交している握手とは、いささか雰囲気も異なり、いま握手している手を解くことさえ惜しまれる別れとなり、この握手の手を解けば後はどの様な運命を辿ることになるのか、全く予断も許されない「露の別れ」そのものだと、心に深く感じ入れたのである。（忠彦）

親しい人を見舞った作者。握手しながら元気で又会いましょうという言葉をもふと呑み込んでもしかしたらこれが最後の別れになるかも知れないと思ったのである。その後のことは分からないが露の別れとふと思った作者の心の深い気持が見舞って良かったという思いに繋がっていく。人との出会いや別れを季節に語らせざらりと述べて心情が深い句になった。（汀子）

若水集

廣太郎選

鶴・噓

立て続け出でて噓の繋がりぬ 吹田 生澤瑛子
 噓してミス何某の日の遠し 同
 鶴舞ひぬ空青ければ影青く 同
 川靄が鶴つつみこむ野の朝 枚方 富士みのる
 トレモ口の震はず原野鶴の舞 同
 空は空野は野に映ゆる鶴群飛 同
 影長くなり夕鶴となりゆけり 北九州 田上昭典
 羽搏くも佇むもみな夕鶴に 同
 鶴世界昏れゝばやがて星世界 同
 天上も天下も鶴のための里 熊本 竹澤則夫
 鶴もまた過密となりし鶴の里 同
 鶴を見るときが一服駐在所 同
 全身に響き残れる噓かな 静岡 須藤常央
 天上天下我一人なる噓かな 同
 地震に揺れたるか噓に揺れたるか 同
 わが噓鳩の百羽を舞ひ翔たせ 東京 大和 勲
 教室をふるはずほどの噓かな 同
 くさめして威儀もへちまもなかりけり 同

噓してだらりの帯の左右に揺れ 神戸 千原叡子
 笑うてもをれぬ噓のなほつづく 同
 鶴になりきる飼育士と鶴の雛 同
 一噓して太陽を呼び出せる 八尾 岩垣子鹿
 太陽を探して二つ目の噓 同
 三つ目は自嘲気味なる大噓 同
 我慢するくさめ眉間に持て余す 枚方 中嶋陽太
 顔中の鼻になりたる噓かな 同
 一楽章耐へに耐へたる噓かな 同
 逆光も順光も鶴舞へる空 香川 湯川 雅
 噓して一人の部屋を大きくす 同
 三度目の噓小さく付け足しぬ 同
 大噓居留守がばれてをりにけり 茨木 大野伊都子
 くさめ児に母来る祖母が飛んで来る 同
 噓してNGとなる大女優 同
 降り立ちて鶴の家族でありしかな 西宮 田中祥子
 舞ふ鶴に落暉明るき空のあり 同
 鶴の舞ふ峡の月下でありにけり 同
 視野暗むほど一斉に鶴翔てり 北九州 坂中紀子
 風やみて鶴の羽音に暮るる里 同
 オリオンの闇に万羽の鶴眠る 同
 噓してレッスンワルツより始む 千葉 大木さつき
 噓して無器用が解く京土産 同
 噓してこなし切れざる予定組む 同

若水集句評 廣太郎

噓してミス何某の日の遠し 吹田 生澤瑛子

ひよつとして、なんて甚だ失礼であるが、御自身過去に「ミス〇〇」という方なのだろうか。それとも近い何方か。何れにせよ所謂美人も「噓」をすることでどうしても顔が歪んでしまうのである。美人コンテストも、最近はセクハラの問題からかあまり開催されていないようだが、季題をユニークに捉えている。

天上も天下も鶴のための里 熊本 竹澤則夫

九州では鹿児島の出水や熊本八代が鶴の里として有名であるが、行かれたのであろうか。いずれにせよ、多くの「鶴」がこの時期生息している姿は爽快である。「天上」「天下」がそれぞれその全ての場所と見て取れ、雄大な景が目の前に拡がってくる。

大噓居留守がばれてをりにけり 茨木 大野伊都子

筆者もふくめて、これは結構経験のある方がおられるのではないだろうか。白状すると、ホトトギス社で「編集長室」のドア、カーテンが閉められている時は大体在室しているのである。そんな

な時に限って「噓」が出る。考えてみると決まってそれは冬である。やはり季題たる所以か。

オリオンの間に万羽の鶴眠る 北九州 坂中紀子

冬の代表的な星座である「オリオン」を採用している歳時記もあるが、今回の兼題「鶴」との絶妙の取り合わせの句である。凜とした夜空を彩る星座を振りかぶりながら多く眠っている姿を想像すると、その雄大な美しさが伝わってくるだろう。

噓して無器用が解く京土産 千葉 大木さつき

包を開けている時思わずしてしまったのだろうか、「無器用」とは気の毒ではあるが、「噓」をしながら他の動作をするという事は、誰でも手元が狂ってしまうものである。「京土産」となるとしても雅な品も想像して、その仕草がより一層ユニークに伝わってくる句である。

夜風立ち鶴唳のなほ鎮まらず 熊本 加藤芳子

結構「鶴」の鳴き声はその優美な姿に比べて雄々しいのではないだろうか。この句もたくさんの鶴の様子が窺えるが、だんだん日が暮れてきて風も立ち始めたのだろうか。そんな中でも雄々しく鳴いている声に着目し、ひとつの景を詠んでいる。聴覚的な情景が醸し出されている。